

# I 調査結果の概要

# 1 米

## (1) 要 旨

平成28年産水陸稲の収穫量は、水稻が804万2,000 t、陸稲が2,060 t となり、合計で804万4,000 t で、前年産に比べ5万5,000 t（1%）増加した。これは水稻の作付面積が前年産に比べ2万7,000ha（2%）減少したものの、10 a 当たり収量が前年産を13kg（2%）上回ったためである。

水稻の作柄は、生育期間を通じておおむね天候に恵まれたため、全国の10 a 当たり収量は544kg（作況指数103）となった。

陸稲の作柄は、主産県である茨城県において、7月下旬から8月上旬にかけての高温・少雨の影響により生育が抑制されたこと等から、全国の10 a 当たり収量は218kg（平均収量対比94%）となった。

平成28年産水稻の被害量は47万8,000 t となった。被害率は6.1%で、平年に比べ2.5ポイント、前年産に比べ2.0ポイント下回った（表1-1、図1-1）。

図1-1 水稻の作付面積及び収穫量の推移（全国）

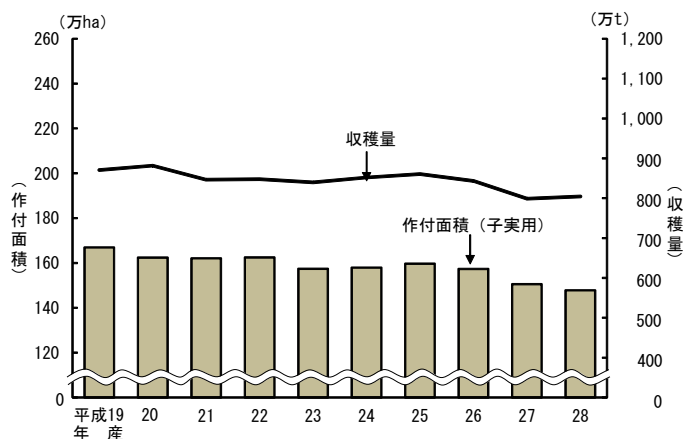


表1-1 平成28年産水陸稲の作付面積、10 a 当たり収量、収穫量及び被害量

全 国 農 業 地 域	作付面積 (子実用) 千ha	10 a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 (子実用) 千t	前 年 産 と の 比 較						参 考		
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量		収 穫 量		主 食 用 作 付 面 積 千ha	収 穫 量 (主食用) 千t	作 況 指 数 (対 平 年 比)
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比			
水 陸 稲 計	1,479.0	-	8,044.0	△ 27.0	98	nc	55.0	101	...	...	-	
水 稻	1,478.0	544	8,042.0	△ 27.0	98	102	56.0	101	1,381.0	7,496.0	103	
北 海 道	105.0	551	578.6	△ 2.8	97	99	△ 24.0	96	99.0	545.5	102	
東 北 北	375.9	576	2,165.0	△ 5.4	99	99	△ 44.0	98	333.7	1,917.0	103	
北 北 陸	205.6	567	1,165.0	△ 2.2	99	107	61.0	106	182.1	1,031.0	107	
関 東・東 山	270.5	542	1,465.0	△ 4.6	98	103	18.0	101	259.9	1,407.0	101	
東 海	93.4	514	480.3	△ 1.8	98	104	10.1	102	91.4	469.5	102	
近 畿	104.5	516	538.7	△ 1.3	99	102	1.5	100	100.5	519.0	102	
中 国	106.0	526	557.3	△ 2.1	98	105	13.4	102	102.2	537.9	102	
四 国	50.9	492	250.5	△ 1.2	98	106	7.7	103	50.5	248.7	102	
九 州	165.7	507	839.7	△ 5.0	97	105	12.9	102	161.3	817.5	101	
沖 縄	0.8	293	2.3	△ 0.0	100	100	△ 0.0	99	0.8	2.3	95	
陸 稲	0.9	218	2.1	△ 0.2	81	94	△ 0.6	76	...	...	94	

全 国 農 業 地 域	被 害			被 害 率		
	被害面積 千ha	被害 実面積 千ha	被害量 千t	被 害 率		
				本 年	対 平 年 差	対 前 年 差
水 陸 稲 計	...	...	...	...	...	...
水 稻	2,746.0	1,252.0	478.0	6.1	△ 2.5	△ 2.0
北 海 道	198.4	89.8	38.7	6.8	△ 2.8	1.6
東 北 北	673.5	354.6	125.3	6.0	△ 3.2	0.7
北 北 陸	171.9	113.2	11.3	1.0	△ 3.8	△ 4.6
関 東・東 山	498.0	225.9	109.6	7.6	△ 0.6	△ 2.2
東 海	209.1	88.7	21.7	4.6	△ 2.0	△ 3.8
近 畿	163.4	78.3	26.1	4.9	△ 2.3	△ 1.9
中 国	176.2	90.5	32.3	5.9	△ 1.7	△ 4.4
四 国	156.9	49.2	21.5	8.7	△ 2.5	△ 5.8
九 州	497.7	161.5	91.0	11.0	△ 1.1	△ 3.8
沖 縄	1.0	0.7	0.4	14.7	5.2	0.4
陸 稲	...	...	...	...	...	...

- 注：1 10 a 当たり収量及び収穫量は、1.70mmのふるい目幅で選別された玄米の重量である。  
 2 作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでの目幅（北海道、東北及び北陸は1.85mm、関東・東山、東海、近畿、中国及び九州は1.80mm、四国及び沖縄は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。  
 3 陸稲の作況指数欄は、10 a 当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10 a 当たり収量の比率である。  
 4 主食用作付面積とは、水稻作付面積（青刈り面積を含む。）から、生産数量目標の外数として取り扱う米穀等（備蓄米、加工用米、新規需要米等）の作付面積を除いた面積である。  
 5 被害面積は被害種類別の面積を合計したもので、2種類以上の被害を受けた場合は重複して計上してある。  
 6 被害実面積は上記5のうち、重複部分を除いた面積である。  
 7 被害率は（被害量÷年平均収量）×100である。  
 8 被害率の対平年差は、昭和54年以降の異常値除外平均被害率との差である。

## (2) 解説

### ア 作付面積（子実用）

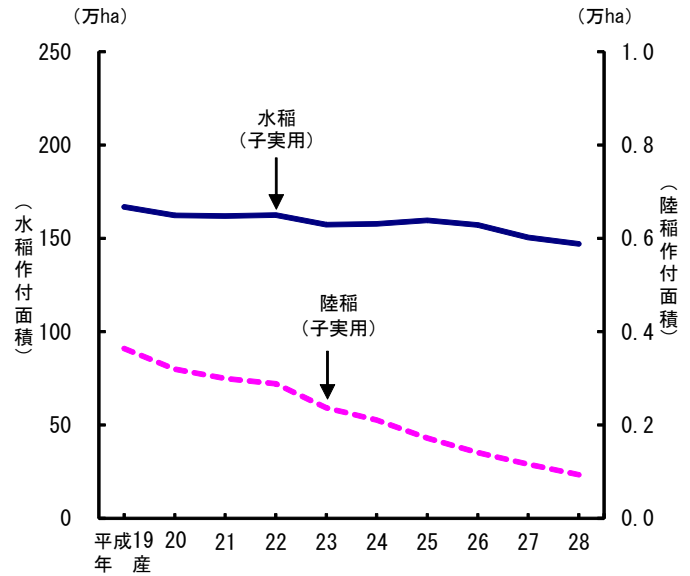
#### (ア) 水 稲

平成28年産水稲（子実用）の作付面積は147万8,000haで、前年産に比べ2万7,000ha（2%）減少した（表1-1、図1-2）。

#### (イ) 陸 稲

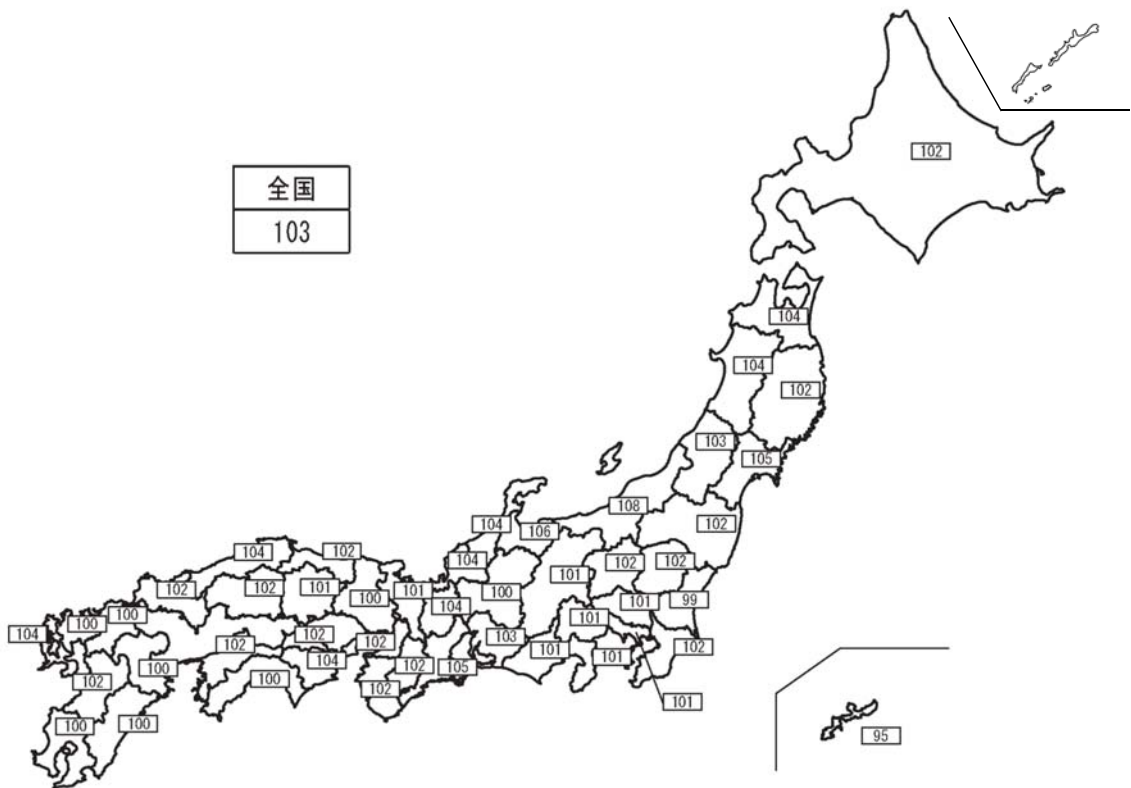
平成28年産陸稲（子実用）の作付面積は944haで、前年産に比べ216ha（19%）減少した（表1-1、図1-2）。

図1-2 水陸稲の作付面積の推移（全国）



### イ 作柄概況

図1-3 平成28年産水稲の都道府県別作況指数



注：1 作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでの目幅（北海道、東北及び北陸は1.85mm、関東・東山、東海、近畿、中国及び九州は1.80mm、四国及び沖縄は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

2 徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県及び沖縄県の作況指数は早期栽培（第一期稲）と普通期栽培（第二期稲）を合算したものである。

(ア) 水 稲

a 北海道

田植期は平年に比べ3日早くなり、出穂期は2日遅くなった。

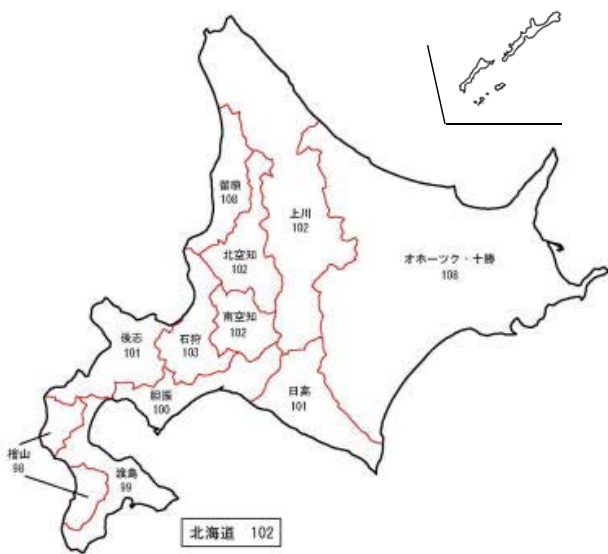
6月上旬から中旬にかけて日照時間が平年を下回ったものの、7月には天候が回復したことから、穂数は、「平年並み」、1穂当たりもみ数は、「やや少ない」となり、全もみ数は、「平年並み」となった。

登熟は、8月下旬から9月上旬にかけて、日照時間が平年を下回ったこと等によりやや緩慢となったものの、8月上旬から中旬にかけて、気温・日照時間が平年を上回ったため、「やや良」となった。

以上のことから、北海道の10a当たり収量は551kg（作柄が良かった前年産に比べ8kg減少）となった（図1-4、1-5）。

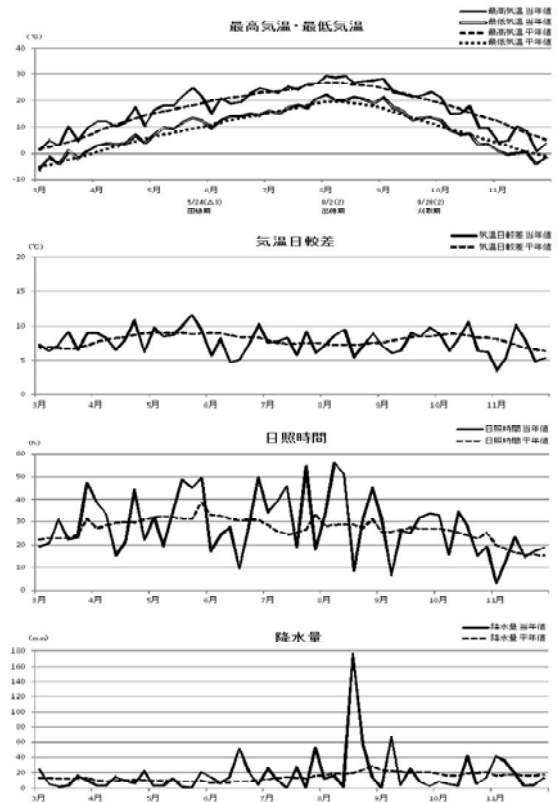
注： 穂数の多少、1穂当たりもみ数の多少、全もみ数の多少、登熟の良否及びの平年比較は、「多い・良」が対平年比106%以上、「やや多い・やや良」が105～102%、「平年並み」が101～99%、「やや少ない・やや不良」が98～95%、「少ない・不良」が94%以下に相当する（以下同じ）。

図1-4 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（北海道）



注：1 作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでの目幅（北海道、東北及び北陸は1.85mm、関東・東山、東海、近畿、中国及び九州は1.80mm、四国及び沖縄は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である（以下1(2)の各図において同じ）。

図1-5 平成28年産稲作期間の半月別気象経過（札幌）



2 □内の数値は都道府県平均の作況指数である（以下1(2)の各図において同じ）。

資料： 気象庁『アメダスデータ』を農林水産省大臣官房統計部において組み替えた結果による（以下1(2)の各図において同じ）。

注： 耕種期日はそれぞれ最盛期である。（ ）内の数値は平年と比較し、その遅速を日数で表しているものであり、△は平年より早いことを示す（以下1(2)の各図において同じ）。

b 東北

田植期は、青森県及び岩手県で平年に比べ1日、その他の県では2日早くなった。出穂期は、宮城県で平年に比べ2日、青森県及び福島県で1日早くなり、その他の県では平年並みとなった。

穂数は、青森県で「やや多い」、岩手県で「やや少ない」、その他の県は「平年並み」となった。1穂当たりもみ数は、宮城県及び秋田県で「やや多い」、青森県で「やや少ない」、その他の県では「平年並み」となった。

このため、全もみ数は、宮城県及び山形県で「やや多い」、岩手県で「やや少ない」、その他の県は「平年並み」となった。

登熟は、出穂期となる8月上旬から中旬にかけて、気温・日照時間が平年を上回り、その後も気温は平年を上回って推移したため、青森県、岩手県、秋田県及び福島県で「やや良」、宮城県及び山形県で「平年並み」となった。

以上のことから、10a 当たり収量は、青森県で604kg（作柄の良かった前年産に比べ12kg減少）、岩手県で540kg（同20kg減少）、宮城県で554kg（前年産に比べ7kg増加）、秋田県で591kg（同2kg増加）、山形県で608kg（作柄の良かった前年産に比べ6kg減少）、福島県で555kg（同2kg減少）となり、東北平均で576kg（同3kg減少）となった（図1-6、1-7）。

図1-6 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（東北）

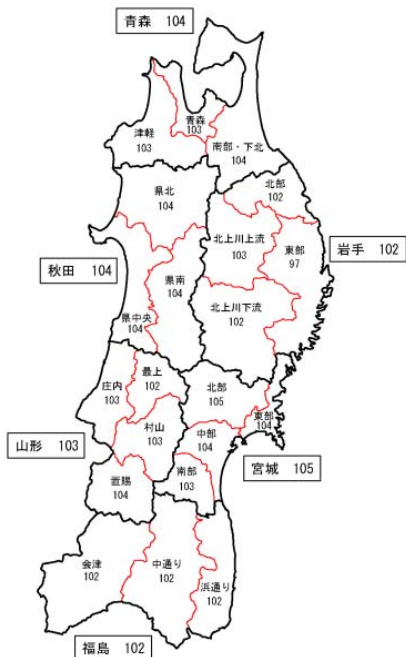
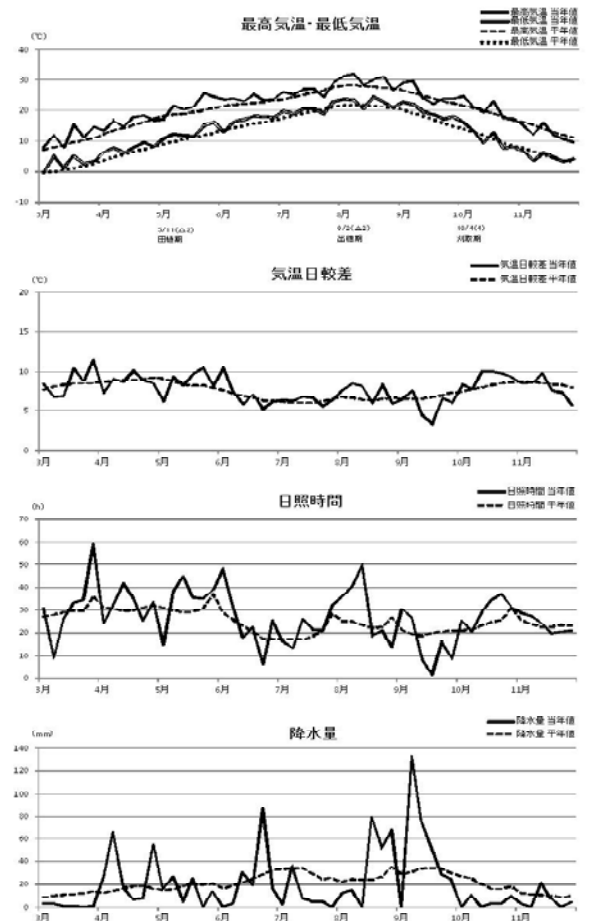


図1-7 平成28年産稲作期間の半旬別気象経過（仙台）



c 北 陸

田植期は、新潟県で平年に比べ3日、石川県で1日早くなり、富山県及び福井県は平年並みとなった。出穂期は、石川県で平年に比べ4日、新潟県及び富山県で3日、福井県で1日早くなった。

穂数は、富山県で「多い」、新潟県及び福井県で「やや多い」、石川県で「平年並み」となった。1穂当たりもみ数は、新潟県及び福井県で「やや少ない」、富山県及び石川県で「平年並み」となった。

このため、全もみ数は、富山県で「多い」、新潟県で「やや多い」、石川県及び福井県で「平年並み」となった。

登熟は、出穂期以降、9月上旬まで気温・日照時間が平年を上回って推移したため、新潟県、石川県及び福井県で「やや良」、富山県で「平年並み」となった。

以上のことから、10a 当たり収量は、新潟県で581kg（前年産に比べ54kg増加）、富山県で566kg（同7kg増加）、石川県で534kg（同12kg増加）、福井県で535kg（同17kg増加）となり、北陸平均で567kg（同36kg増加）となった（図1-8、1-9）。

図1-8 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（北陸）

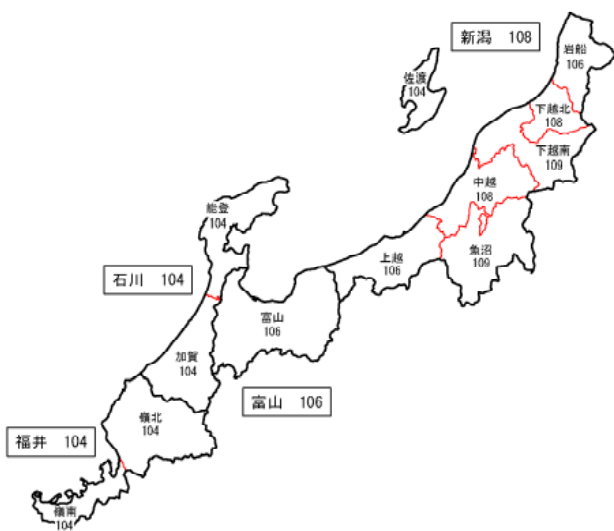
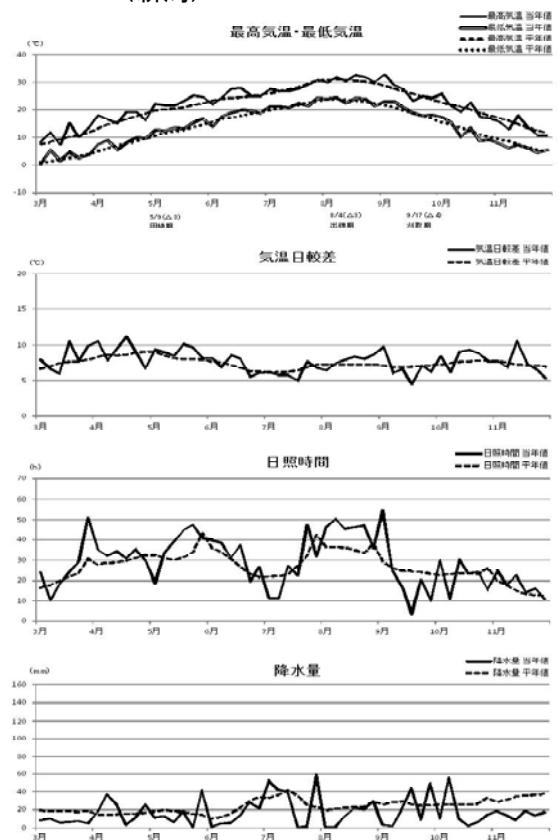


図1-9 平成28年産稲作期間の半月別気象経過（新潟）



d 関東・東山

田植期は、山梨県で平年に比べ3日、群馬県及び埼玉県で2日、茨城県、栃木県及び千葉県で1日早くなり、その他の都県では平年並みとなった。出穂期は、山梨県で平年に比べ4日、栃木県で3日、茨城県、埼玉県、千葉県及び長野県で2日、群馬県で1日早くなり、東京都は平年並み、神奈川県では1日遅くなった。

穂数は、栃木県で「やや多い」、群馬県及び埼玉県で「平年並み」、その他の県では「やや少ない」となった。1穂当たりもみ数は、千葉県で「多い」、山梨県及び長野県で「平年並み」、その他の県では「やや多い」となった。

このため、全もみ数は、栃木県、群馬県、埼玉県及び千葉県で「やや多い」、長野県で「やや少ない」、その他の県では「平年並み」となった。

登熟は、8月中旬以降、日照時間が平年を下回った期間があったものの、気温がおおむね平年を上回って推移したため、神奈川県、山梨県及び長野県で「やや良」、茨城県及び千葉県で「平年並み」、栃木県、群馬県及び埼玉県で「やや不良」となった。

以上のことから、10 a 当たり収量は、茨城県で521kg（前年産に比べ16kg増加）、栃木県で551kg（同20kg増加）、群馬県で505kg（同16kg増加）、埼玉県で494kg（同14kg増加）、千葉県で549kg（同10kg増加）、東京都で415kg（同10kg増加）、神奈川県で495kg（同10kg増加）、山梨県で547kg（同8kg増加）、長野県で624kg（同20kg増加）となり、関東・東山平均で542kg（同16kg増加）となった（図1-10、1-11）。

図1-10 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（関東・東山）

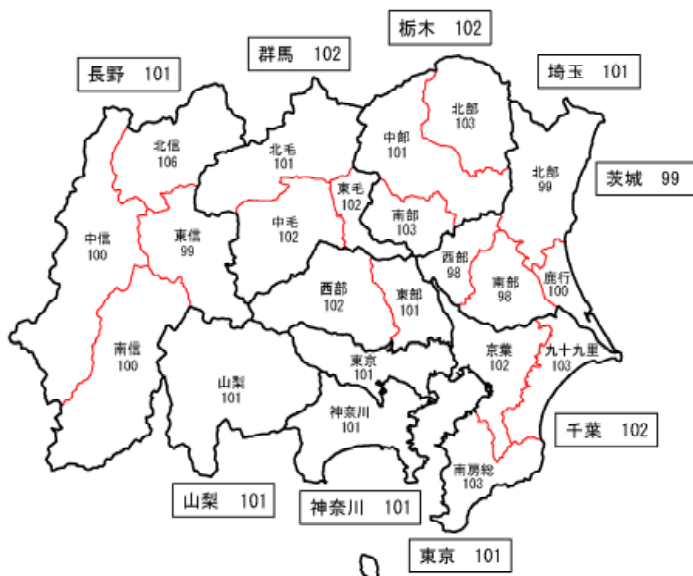
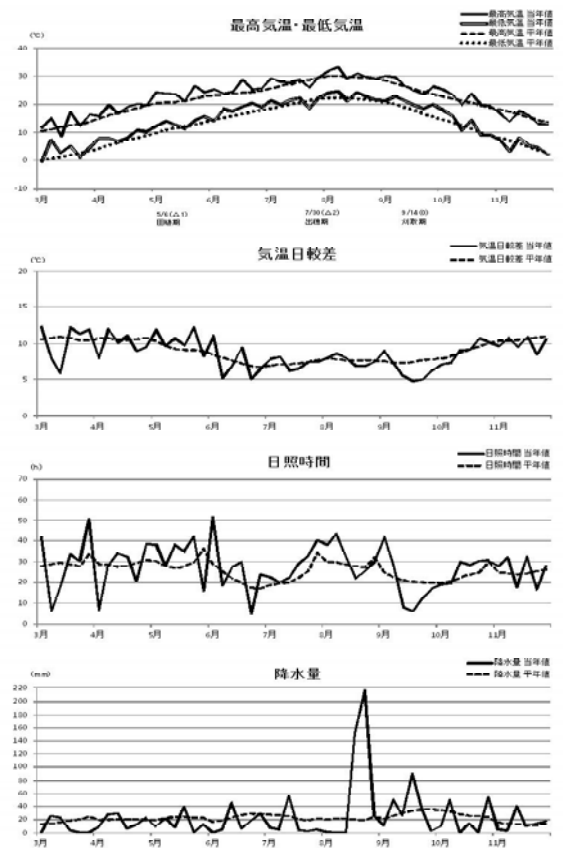


図1-11 平成28年産稲作期間の半月別気象経過（水戸）



e 東海及び近畿

田植期は、静岡県で平年に比べ3日、三重県で2日、愛知県、滋賀県、兵庫県及び和歌山県で1日早くなり、その他の府県では平年並みとなった。出穂期は、静岡県、三重県及び滋賀県で平年に比べ4日、京都府で3日、岐阜県、大阪府及び和歌山県で2日、愛知県及び兵庫県で1日早くなり、奈良県では平年並みとなった。

穂数は、岐阜県、滋賀県、大阪府、奈良県及び和歌山県で「平年並み」、その他の府県では「やや少ない」となった。1穂当たりもみ数は、岐阜県及び兵庫県で「平年並み」、その他の府県では「やや多い」となった。

このため、全もみ数は、滋賀県、大阪府、奈良県及び和歌山県で「やや多い」、兵庫県で「やや少ない」、その他の府県では「平年並み」となった。

登熟は、8月上旬から9月上旬にかけて、気温・日照時間がおおむね平年を上回って推移したため、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県及び兵庫県で「やや良」、その他の府県では「平年並み」となった。

以上のことから、10a当たり収量は、岐阜県で486kg（前年産に比べ5kg増加）、静岡県で525kg（同22kg増加）、愛知県で521kg（同18kg増加）、三重県で522kg（同32kg増加）、滋賀県で534kg（同16kg増加）、京都府で516kg（同6kg増加）、大阪府で505kg（同10kg増加）、兵庫県で501kg（前年産と同値）、奈良県で525kg（前年産に比べ10kg増加）、和歌山県で507kg（同8kg増加）となり、東海平均で514kg（同20kg増加）、近畿平均で516kg（同8kg増加）となった（図1-12、1-13）。

図1-12 平成28年産水稻の作柄表示地帯別  
作況指数（東海及び近畿）

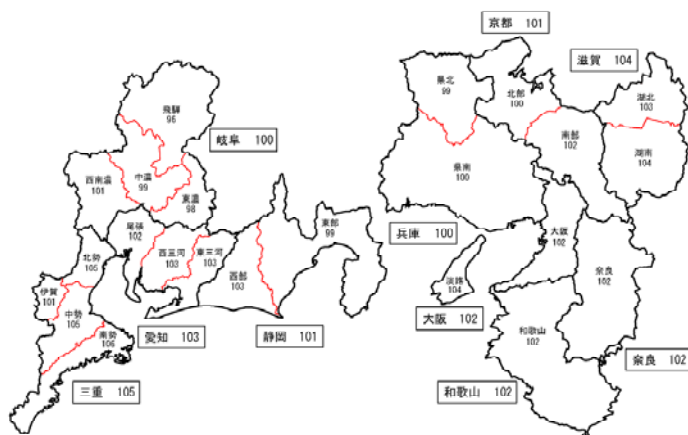
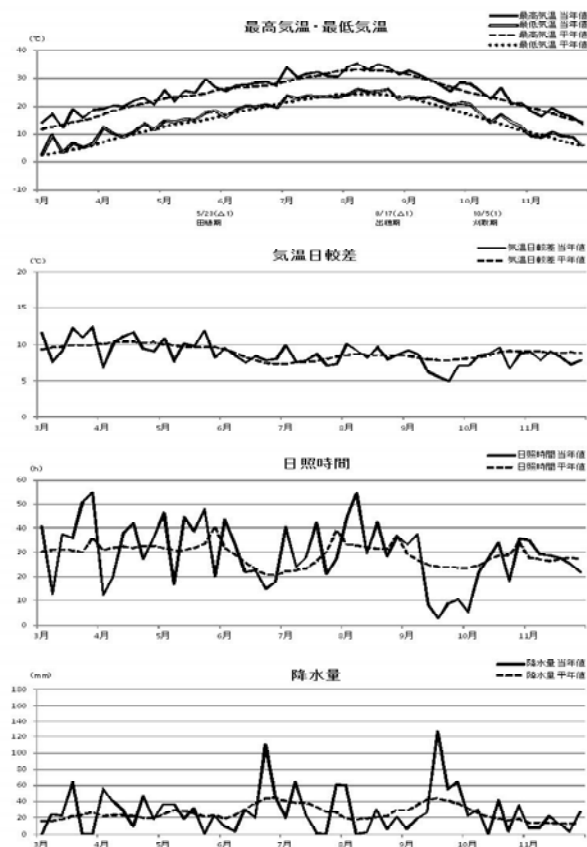


図1-13 平成28年産稲作期間の半月別気象経過  
（名古屋）





f 中国及び四国

田植期は、島根県、徳島県（早期栽培）及び高知県（普通栽培）で平年に比べ2日、鳥取県、広島県、高知県（早期栽培）で1日早くなり、その他の県では平年並みとなった。出穂期は、島根県及び高知県（早期栽培）で平年に比べ6日、徳島県（早期栽培）で4日、愛媛県で3日、鳥取県、岡山県、山口県、徳島県（普通栽培）、香川県及び高知県（普通栽培）で2日、広島県で1日早くなった。

穂数は、徳島県（早期栽培）、香川県及び愛媛県で「平年並み」、鳥取県及び広島県で「少ない」、その他の県では「やや少ない」となった。1穂当たりもみ数は、徳島県（普通栽培）で「多い」、香川県で「平年並み」、その他の県は「やや多い」となった。

このため、全もみ数は、徳島県（早期及び普通栽培）及び愛媛県で「やや多い」、島根県、広島県、山口県及び香川県で「平年並み」、その他の県では「やや少ない」となった。

登熟は、7月から8月にかけて、気温・日照時間がおおむね平年を上回って推移したため、香川県で「平年並み」、愛媛県で「やや不良」となったほか、その他の県では「やや良」となった。

以上のことから、10a当たり収量は、鳥取県で522kg（前年産に比べ10kg増加）、島根県で528kg（同25kg増加）、岡山県で533kg（同28kg増加）、広島県で531kg（同24kg増加）、山口県で512kg（同21kg増加）、徳島県で490kg（同33kg増加）、香川県で508kg（同38kg増加）、愛媛県で508kg（同20kg増加）、高知県で458kg（同14kg増加）となり、中国平均で526kg（同23kg増加）、四国平均で492kg（同26kg増加）となった（図1-14、1-15）。

図1-14 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（中国及び四国）

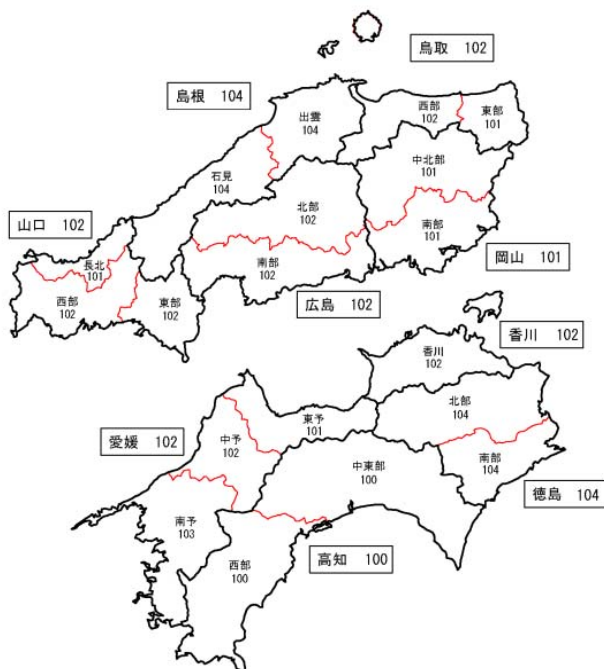
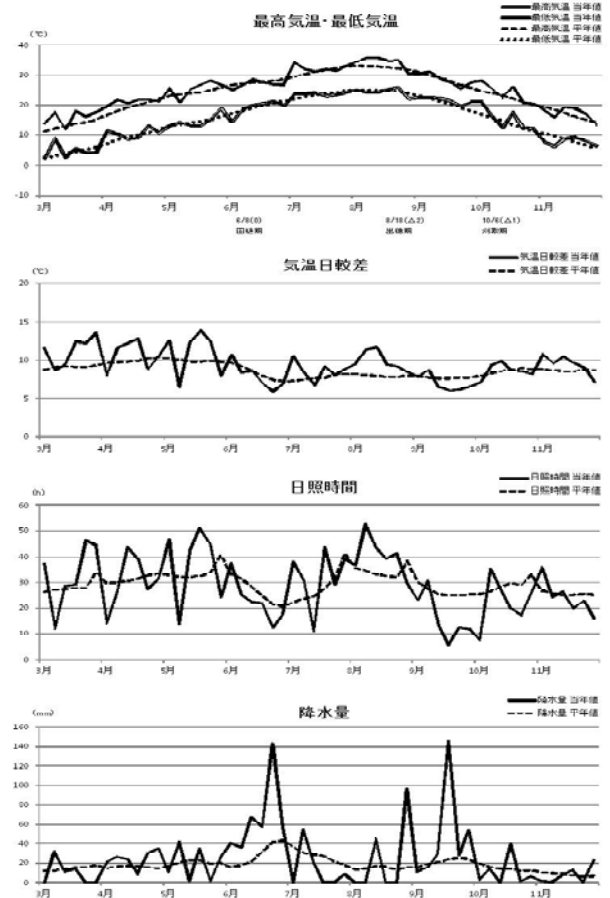


図1-15 平成28年産稲作期間の半旬別気象経過（岡山）



g 九州及び沖縄

九州においては、田植期は、熊本県で平成28年熊本地震の影響により平年に比べ3日遅くなったものの、長崎県、宮崎県（早期及び普通栽培）で2日、その他の県では1日早くなった。出穂期は、鹿児島県（早期栽培）で平年に比べ7日、宮崎県（早期栽培）及び鹿児島県（普通栽培）で6日、長崎県及び大分県で4日、佐賀県及び宮崎県（普通栽培）で3日、福岡県及び熊本県で2日早くなった。

穂数は、長崎県で「多い」、佐賀県及び熊本県で「やや多い」、宮崎県（早期栽培）で「少ない」、その他の県では「平年並み」となった。1穂あたりもみ数は、宮崎県（普通栽培）で「多い」、福岡県、佐賀県、長崎県及び鹿児島県（普通栽培）で「やや多い」、その他の県では「平年並み」となった。

このため、全もみ数は、長崎県で「多い」、福岡県、佐賀県、熊本県、宮崎県（普通栽培）及び鹿児島県（普通栽培）で「やや多い」、大分県及び鹿児島県（早期栽培）で「平年並み」、宮崎県（早期栽培）で「少ない」となった。

登熟は、出穂期以降、気温・日照時間がおおむね平年を上回って推移したものの、9月中旬以降、日照時間が平年を下回ったこと等から、宮崎県（早期栽培）では「やや良」、福岡県、熊本県及び大分県で「平年並み」、佐賀県、長崎県、宮崎県（普通栽培）及び鹿児島県（早期及び普通栽培）で「やや不良」となった。

以上のことから、10 a 当たり収量は、福岡県で501kg（前年産に比べ21kg増加）、佐賀県で521kg（同8 kg増加）、長崎県で496kg（同17kg増加）、熊本県で527kg（同27kg増加）、大分県で504kg（同26kg増加）、宮崎県で498kg（同34kg増加）、鹿児島県で483kg（同25kg増加）となり、九州平均で507kg（同23kg増加）となった。

沖縄県は、第一期稲が351kg（前年産に比べ9 kg増加）となったものの、第二期稲が台風16号及び17号の影響により148kg（同32kg減少）となったことから、県計の10 a 当たり収量は293kg（同1 kg減少）となった（図1-16、1-17）。

図1-16 平成28年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（九州及び沖縄）

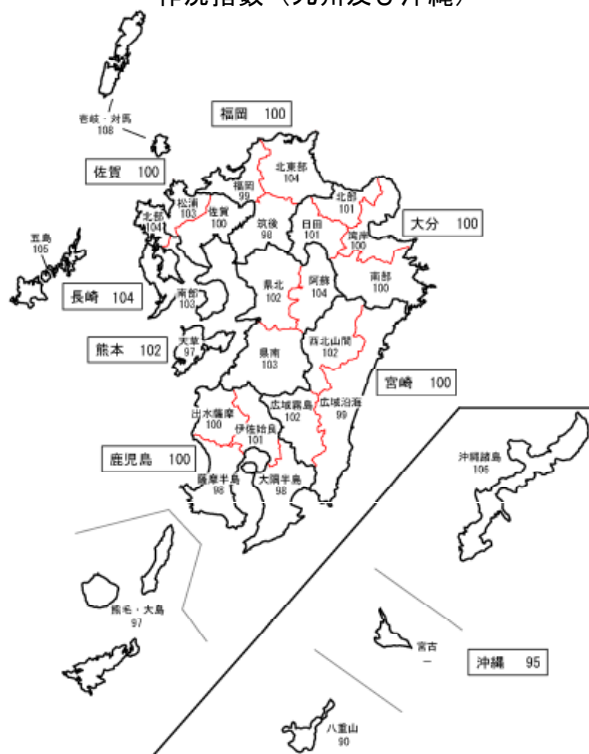
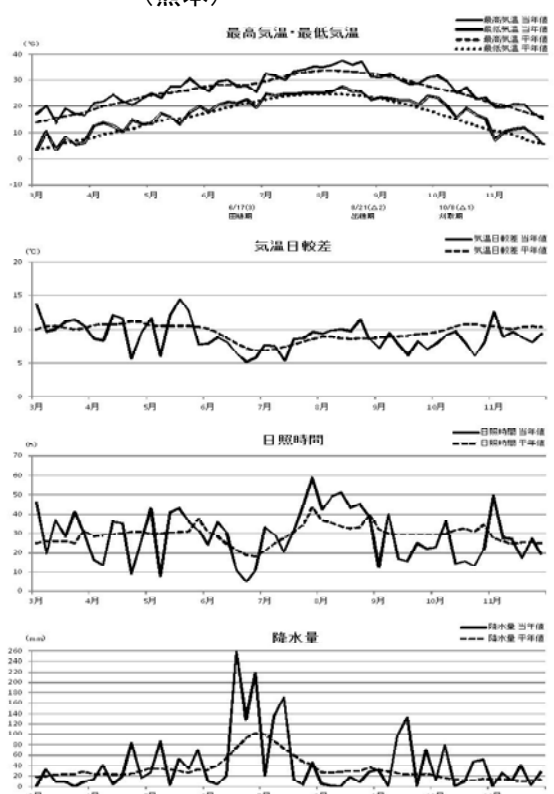


図1-17 平成28年産稲作期間の半月別気象経過（熊本）



(イ) 陸 稲（主産地域）

主産県である茨城県において、7月下旬から8月上旬にかけての高温・少雨の影響により生育が抑制されたこと等から、10a 当たり平均収量対比は茨城県が91%、栃木県が103%となった（表1-2）。

表1-2 平成28年産陸稲の作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考) 10 a 当 たり 平均収量対比
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比	
全 国	千ha 0.9	kg 218	千 t 2.1	千ha △ 0.2	% 81	% 94	千 t △ 0.6	% 76	% 94	
う ち 茨 城	0.7	212	1.4	△ 0.1	83	90	△ 0.5	75	91	
う ち 栃 木	0.2	239	0.6	△ 0.1	77	102	△ 0.2	78	103	

注： 「(参考) 10a 当たり平均収量対比」とは、10a 当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10a 当たり収量の比率である。

ウ 水稻の被害の概要

全国の被害量は47万8,000 t、被害率は6.1%で、平年を2.5ポイント下回った。

被害種類別にみると、気象被害の被害率は3.8%で、平年を1.6ポイント下回った。このうち、風水害の被害率は0.8%で平年を0.9ポイント下回り、冷害の被害率は0.3%で平年を1.2ポイント下回った。

病害の被害率は1.5%で、平年を0.9ポイント下回った。このうち、いもち病の被害率は0.8%で平年を0.5ポイント下回り、紋枯病の被害率は0.4%で平年を0.2ポイント下回った。

虫害の被害率は0.5%で、平年を0.2ポイント下回った。このうち、ニカメイチュウの被害率は0.1%で平年並み、ウンカの被害率は0.2%で平年を0.1ポイント下回った（表1-3、1-4、図1-18）。

表1-3 平成28年産水稻の被害

被 害 種 類	被 害 面 積	被 害 量	被 害 率		
			本 年	対 平 年 差	対 前 年 差
総 数	ha 2,746,000	t 478,000	% 6.1	ポ ン ト △ 2.5	ポ ン ト △ 2.0
う ち 気 象 被 害	1,503,000	294,800	3.8	△ 1.6	△ 1.6
風 水 害	309,400	66,500	0.8	△ 0.9	△ 0.5
干 害	9,360	2,400	0.0	△ 0.1	0.0
冷 害	125,200	26,900	0.3	△ 1.2	0.0
日 照 不 足	808,500	170,600	2.2	nc	△ 1.3
高 温 障 害	189,100	23,200	0.3	nc	0.1
そ の 他	61,400	5,180	0.1	nc	0.0
病 害	683,300	118,600	1.5	△ 0.9	△ 0.4
い も ち 病	237,100	58,900	0.8	△ 0.5	△ 0.4
紋 枯 病	218,000	34,200	0.4	△ 0.2	△ 0.1
そ の 他	228,200	25,500	0.3	△ 0.1	0.0
虫 害	449,300	41,100	0.5	△ 0.2	0.0
ニカメイチュウ	50,300	5,350	0.1	0.0	0.0
ウ ン カ	61,900	11,900	0.2	△ 0.1	0.1
カ メ ム シ	104,800	8,870	0.1	nc	0.0
そ の 他	232,300	15,000	0.2	nc	0.0

注：1 被害面積は被害種類別の面積を合計したもので、2種類以上の被害を受けた場合は重複して計上してある。

2 被害率は（被害量÷平年収量）×100である。

3 被害率の対平年差は、昭和54年以降の異常値除外平均被害率との差である。

4 気象被害のうち「日照不足」、「高温障害」及び「その他」並びに虫害のうち「カメムシ」及び「その他」については、平成14年産から気象被害及び虫害について表章区分の見直しを行ったことから、平年差の比較をしていない（表1-4において同じ。）。

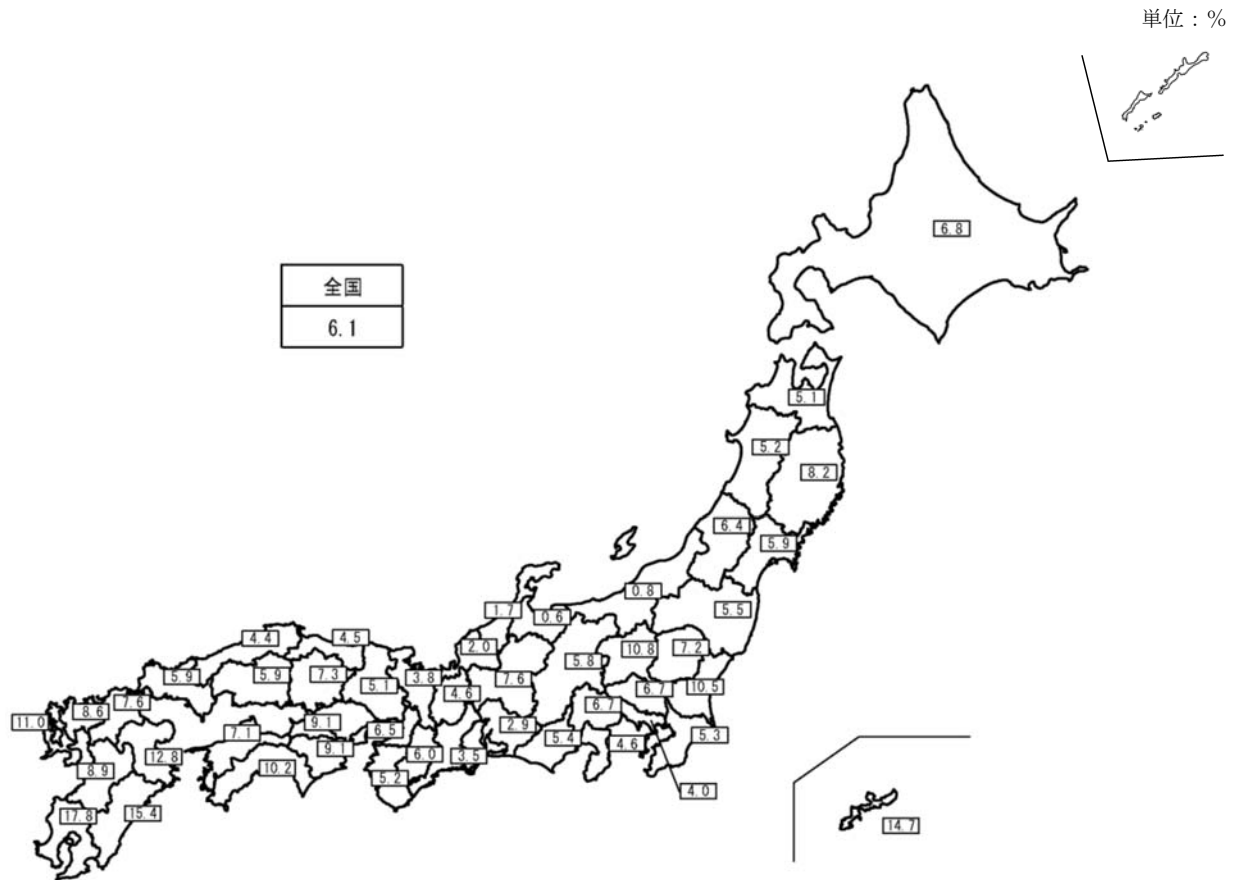
表 1-4 平成28年産水稻の被害種類別被害率及び対平年差（全国農業地域別）

全国農業地域・区分	総数	気象被害					病害			虫害				
		計	風水害	冷害	日照不足	高温障害	計	いもち病	紋枯病	計	ニカメイチュウ	ウンカ	カメムシ	
全 国	被害率 (%)	6.1	3.8	0.8	0.3	2.2	0.3	1.5	0.8	0.4	0.5	0.1	0.2	0.1
	対平年差	△ 2.5	△ 1.6	△ 0.9	△ 1.2	nc	nc	△ 0.9	△ 0.5	△ 0.2	△ 0.2	0.0	△ 0.1	nc
北 海 道	被害率 (%)	6.8	6.3	0.2	3.1	2.9	-	0.4	0.0	0.0	0.1	-	0.0	0.0
	対平年差	△ 2.8	△ 2.2	△ 0.4	△ 3.7	nc	nc	△ 0.5	△ 0.2	0.0	△ 0.1	0.0	△ 0.1	nc
東 北	被害率 (%)	6.0	4.9	0.4	0.4	3.7	0.3	0.7	0.5	0.2	0.2	0.0	0.0	0.1
	対平年差	△ 3.2	△ 2.1	△ 0.8	△ 2.8	nc	nc	△ 1.2	△ 1.1	△ 0.1	0.0	0.0	0.0	nc
北 陸	被害率 (%)	1.0	0.5	0.4	-	-	0.1	0.2	0.1	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0
	対平年差	△ 3.8	△ 3.0	△ 1.3	△ 0.3	nc	nc	△ 0.8	△ 0.5	△ 0.2	△ 0.1	△ 0.1	△ 0.1	nc
関東・東山	被害率 (%)	7.6	4.4	2.0	0.1	1.6	0.6	2.3	1.0	0.7	0.6	0.2	0.1	0.1
	対平年差	△ 0.6	△ 0.1	0.2	△ 0.8	nc	nc	△ 0.6	△ 0.5	△ 0.2	0.0	0.1	△ 0.1	nc
東 海	被害率 (%)	4.6	1.4	0.4	-	0.8	0.0	1.8	0.9	0.5	0.8	0.1	0.1	0.2
	対平年差	△ 2.0	△ 1.3	△ 0.9	△ 0.1	nc	nc	△ 0.9	△ 0.7	△ 0.1	△ 0.1	△ 0.1	△ 0.2	nc
近 畿	被害率 (%)	4.9	1.9	0.5	-	0.9	0.4	1.8	1.0	0.5	0.6	0.1	0.1	0.1
	対平年差	△ 2.3	△ 0.6	△ 0.9	0.0	nc	nc	△ 1.4	△ 0.9	△ 0.3	△ 0.6	△ 0.1	△ 0.6	nc
中 国	被害率 (%)	5.9	2.4	0.6	-	1.7	0.1	2.2	1.2	0.6	0.6	0.1	0.2	0.2
	対平年差	△ 1.7	△ 1.4	△ 1.1	△ 0.1	nc	nc	△ 0.2	△ 0.1	0.0	△ 0.5	0.0	△ 0.4	nc
四 国	被害率 (%)	8.7	4.3	0.8	-	2.5	1.0	3.1	1.3	1.3	0.9	0.1	0.2	0.2
	対平年差	△ 2.5	△ 0.6	△ 2.3	0.0	nc	nc	△ 1.2	△ 0.8	△ 0.1	△ 0.8	△ 0.1	△ 0.6	nc
九 州	被害率 (%)	11.0	5.5	1.5	-	3.6	0.3	3.3	1.7	0.8	1.6	-	0.9	0.2
	対平年差	△ 1.1	△ 0.8	△ 1.3	△ 0.3	nc	nc	△ 0.6	△ 0.1	△ 0.3	△ 0.2	0.0	0.0	nc
沖 縄	被害率 (%)	14.7	4.5	2.9	-	-	-	0.1	0.1	-	4.5	-	-	-
	対平年差	5.2	△ 3.3	△ 2.7	-	nc	nc	△ 0.6	△ 0.5	-	3.8	0.0	△ 0.2	nc

注：1 被害率は（被害量÷平年収量）×100である。

2 被害率の対平年差は、昭和54年以降の異常値除外平均被害率との差である。

図 1-18 平成28年産水稻の都道府県別被害率（総数）



注：徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県及び沖縄県は早期栽培（第一期稲）と普通期栽培（第二期稲）を合算したものである。